

○十一月二十七日月次勝負の結果

二級へ 清水行信

一級へ 高井孝一、福田與志三郎、進藤 茂

二〇 大正五年史

(一) 寒 稽 古

本年は寒稽古を一月十一日開始し、期間を短縮して二十日間となし、一月三十日に終る。皆勤者九十六名、精勤者四名であつた。

寒稽古中一月二十三日月次勝負を行ひ、岩崎三段の五人掛、中野三段の七人掛があつた。

(二) 卒業生送別紅白勝負

二月十三日

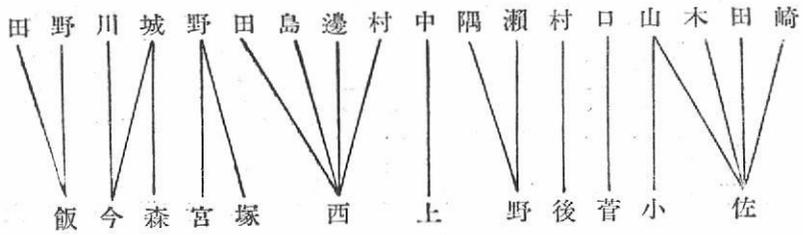


(絞)

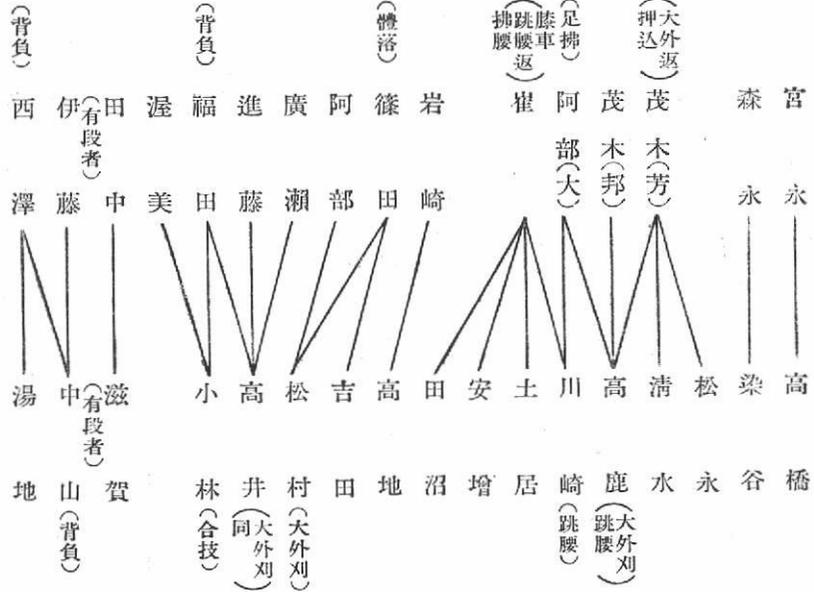
(絞)

(内股)

高添宮八濱前五渡西田三岩田川片鈴岩松



泉 (大外刈)
關 (大外刈)
田
下
本
岡 (左押込絞 腰込)
原
村 (大外刈)
藤
原
林
藤 (同押込 大外刈)



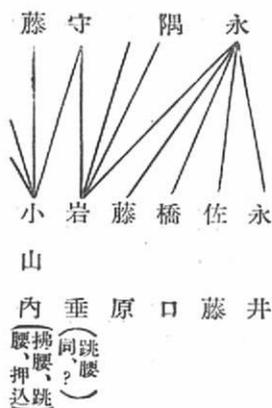
(背負)
西
伊 (有段者)
田
渥
福
進
廣
阿
篠
岩
崔
阿
茂
木
木
森
宮
湯
中
中
小
高
高
松
吉
高
田
安
土
川
高
清
松
染
高
地
山 (背負)
賀
林 (合技)
井 (同大外刈)
村 (大外刈)
田
地
沼
增
居
崎 (跳腰)
鹿 (跳腰 大外刈)
水
永
谷
橋

二〇 大正五年史

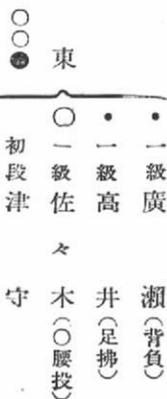
三七三

同内逆内
股股股

五人掛 後 津 森 大 松



二段 坂

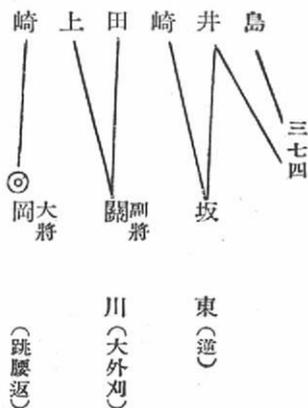


二段 尾

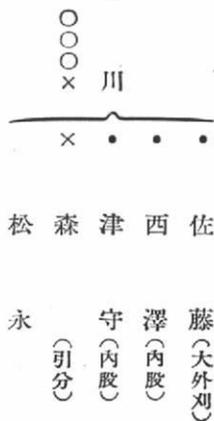


(足拂)

岩大 尾 副 幸 神 菅 幸
將 將 將



三段 關



三段 岡



右終つて午後六時より見晴亭に於て送別の宴を張る。主賓なる卒業生諸君を始め出席者先輩諸遊、湯木、大塚、岡安の諸氏以下五十一名、神崎幹事の送別の辭あり、尾上氏卒業生を代表して謝辭を述べ、献杯の白兵戦に入り、一同十二分の歡を盡して散會した。

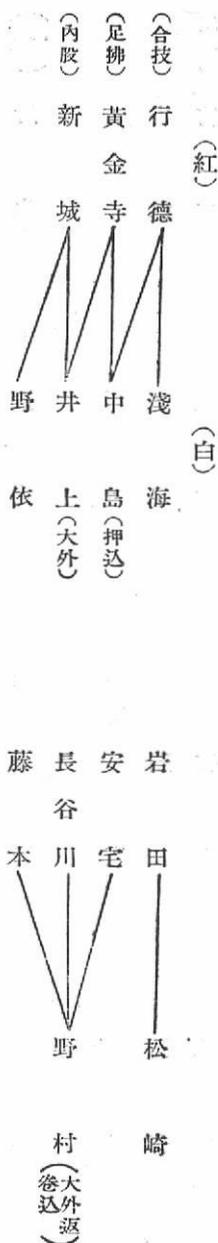
本年度卒業生

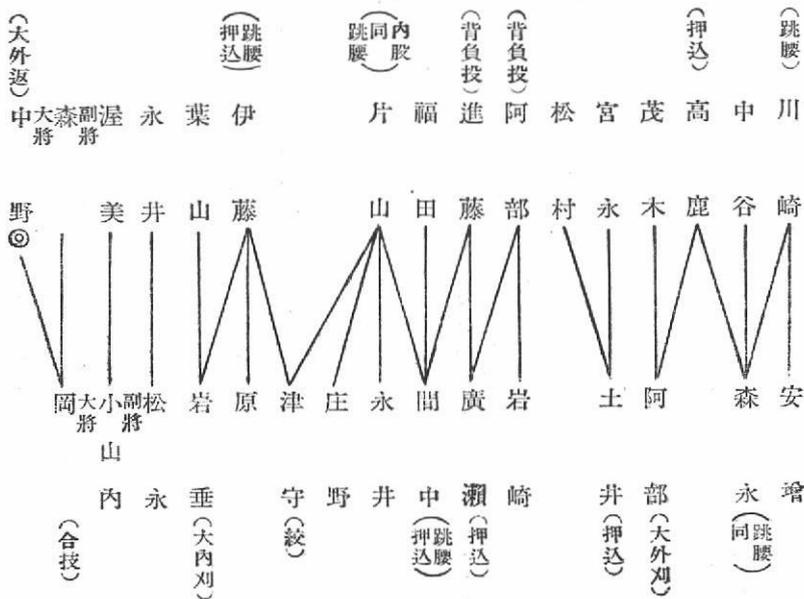
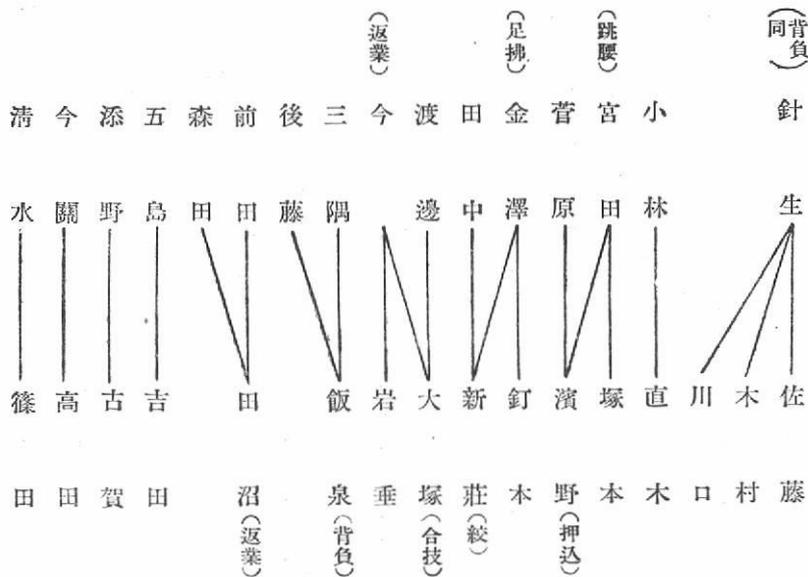
二段 尾上繁二、坂東舜一
初段 藤原惣次郎、後藤辰治、伊澤常三、水永毅、金子友八、甲斐義智、其他。

(三) 新入部員歡迎紅白勝負

四月三十日新入部員歡迎紅白勝負を催す。幼年組及び成年組共に紅組の優勝に歸し、それより松永、永井兩初段、森、萩原兩二段の五人掛を行ひ、六時より例年の通り歡迎茶話會に移り、種々の餘興があつた。

當日の成年組紅白勝負





五人掛

初段 松永 進一

〇〇〇〇●

- 二級 安増潤一郎 (大外刈)
- 同 森永 義忠 (内股)
- 一級 松村 繼彦 (合技)
- 同 阿部 英兒 (〇背負)
- 同 中村 武雄

二段 萩原 準

〇〇〇〇●

- 二級 高田與一郎 (押込)
- 同 阿部 大六 (背負)
- 一級 廣瀬 海人 (大外刈)
- 同 中村 武雄 (押込)
- 初段 尾山 和男 (〇背負)

二段 森 久則

〇〇〇〇●

- 二級 篠田富士男 (押込)
- 同 宮永金太郎 (押込)
- 一級 進藤 茂 (大外)
- 同 岩崎清二郎 (拂腰)
- 初段 庄野 英樹 (〇大外)

初段 永井 元孝

〇〇〇〇●

- 二級 高鹿 正夫 (跳腰)
- 同 土井 文治 (大内刈)
- 同 森永 義忠 (大外返)
- 一級 福田與志三郎 (跳腰)
- 同 中村 武雄 (〇背負)

(四) 第五回對四校聯合勝負

五月二十八日 (日曜日)

一ヶ月許りの間、意地悪くも日曜日毎に降り続いた雨も、今日は幸に霽れて朝から日本晴の好天氣、此の雲も無い大空に處得顔の太陽は、遠慮も會釋も有らばこそ、デリ／＼照して早や眞夏の様な蒸し暑さ。

聯合軍との試合には、何時も本塾が勝ち續けて居るとは云ふものゝ、今年も敵も必勝を期して猛烈な稽古を積んで居る

との事、仲々油断は出来ないが、我軍とても一騎當千の武者揃ひ、喜んで敵の挑戦に應じた。

試合は午後二時から高工の道場で行はれた。あまり廣くはないが、新築の道場で絶えず大川から涼しい風の吹き込んで来るのが、如何にも氣持が好い。

我軍の先頭として駒を進めたのは佐藤權君、敵は農大の星子某である。佐藤君吾こそ魁の功名をと奮闘よく力めたが、敵もさる者、惜しくも其合せ業に破られて退いた。これは味方の幸先が悪いと案ぜられたが、針生君が出て何なく喰ひ止めてからは、だん／＼優勢になつて來た。野村君が足拂で一人を抜き、長谷川君出でて得意の跳腰で立どころに三人まで倒した。宮下君神田某の背負返に破られて退いたが、渡邊君、釘本君、濱野君各一人を倒し、西岡君五人を抜くに及んで、味方の士氣はいよ／＼上つた。君は我軍の元氣者、先づ吉永、小岩井の二人を足拂で破り、續く若狹を内股で、高橋を腰投で、弘中を送足拂で、とう／＼五人まで叩きつけてしまつた。今日第一の殊勳者として君の奮闘に感謝せねばならぬ。西岡君漸く疲勞を覺えて、江口某の内股に敗れたが、塚田君が苦も無く江口を押し込み、續く藤井に勝をゆづつて退く。此時人氣者の大塚君、小兵ながらも奮闘好く力めて遂に美事な背負投で友の仇を討ち、更に守野某と引分けて大いに味方の爲めに氣を吐いた。新進の元氣者田中君が出て、小笠原某を跳ね飛ばし、櫻山某と引分。直木君、田畑君武運拙くして討死したが、渡邊君が小原を大外で、菊池を跳腰で、高橋を内股で破つて回復した。佐伯某の爲めに渡邊君以下五人破られ、後また岩崎某に五人抜かれて再び味方の不利となつたが、土井君、高田君、今關君、吉田君の奮闘に次いで、菅原君が跳腰、小内刈、内股で三人を破り、山中と引分けるに及んでまた形勢を挽回した。三隅君大外に破れて退いたが、安増君之と引分け、染谷君一人を倒し、飯泉君、清水君共に引分に終る。稽古よりも勝負が強いと評判の芳兵衛君が、黒崎某を小内刈で破つて、加藤と引分は物足りない感があった。幼年組でも殊に業師の川崎君が、小内刈や背負の連發で、澤田某を破り、大いに紫帯の鮮やかな所を見せた。敵の永井某も仲々の切れ者、川崎君、篠田君の敗れたるは是非もなし。添野君之

と引分く。高鹿君と伊藤某共に短身肥大、對照頗る妙、力も五角で引分は面白かつた。森永君と阿部（大）君は共に新進の元氣者、然かも相手は一級である。森永君は自分より三四寸も高い山崎の跳腰を苦も無く返し、續く高松某をも得意の跳腰で投げ飛ばして、遂に藤田某と引分けた。阿部君も左背負で小泉を叩きつけ、津野の大外を其儘巻き込んで裏を取り、續く中村と引分けた。阿部（大）君も共に金鵝勳章に値する今日の殊勳者であつた。田中君惜しくも裏投げに破れて退けば、井上君出でて大外刈で仇を討ち、續く横山を背負投げ小村と引分けた。福田君日頃の元氣に似もやらず、沼田某の小外刈に破られ、海人廣瀬君、亦背負投で飽ッ氣無くも敗れて退けば、岩崎君憤然として進み、内股で業有りまで取つたが時間が來て引分。元氣者の間中君と、高井君の引分は少からず吾人の期待に反いたが、崔君の美事なる奮闘で俄かに數百千の味方を得た様な氣がした。大道と云へば一級でも強いと評判の男とか。これを大外で倒し、遂に押込みで破り、續く佐藤の跳腰を美事に返し、栗林を足拂で破り、辻村を跳腰で投げ飛ばし、瞬く間に四人まで投げ倒した鮮かさ。紫帯の若武者が此の日醒ましい奮闘振りには、敵も味方も等しく驚嘆した。吉岡某、川嶋某各三人を破つて引分は敵ながら天晴々々。とは云ふものの瀧川、高地、田中、進藤、阿部（英）の猛者連が枕を並べての討死は、味方の爲には少からず打撃であつた。

敵はもう有段者が出陣した。先づ出たのが初段川内某、我軍の是に對するは實力既に初段と認められたる伊藤文健君である。伊藤君しきりに攻め立てて屢々敵を危地に陥れたが、遂に時間が來て引分に終る。次は一級最古參の天田君、永い間稽古を休んで居たとは雖も流石は古狸、敵の初段和田某とわたり合ひ數分間争つたが、大内刈と背負の合業に惜くも勝を敵に譲つた。之に勢を得た敵はいよく圖に乗つて、運よくも我が永井君を破つたが、佐々木君に遇つては刃が立たず、苦も無く跳腰に屠られてしまつた。日宗の加藤某、最初から佐々木君の敵でない事を悟り、徒らに寢業に時を費しての引分は、敵に取つては定めし本望の事であつたらうが、充分の腕を振はずに退かねばならなかつた我が佐々木君には、同情

に堪えなかつた。葉山君延某と挑み戦つたが勝敗決せず、伊藤君と内藤某との對戦となつた。兩者共に長驅、體格は先づ五角と見えた。伊藤君先づ得意の跳腰で業有りを取つて敵の膽を奪つたが、最後に敵の内股に勝を譲つたのは惜かつた。次で津守君出でて背負投で仇を討ち、續く日宗の荒木入道と引分けた。荒木は人並外れた大男、津守君とは體格に於て既に甚しき相違あり、力をたのんで津守君を振り廻さうとしたが、津守君巧に避けて遂に彼をして施す所無からしめたのは天晴當日の殊勳者の一人に數へねばならぬ。岩垂君と栗本某は代つて出た。岩垂出鼻に得意の跳腰で殆ど一本に近い業有りを取れば、敵は俄に怖れをなして専ら防戦に力めたが、遂に美事な大外刈で討ち取つた。岩垂君が佐々木某に敗れて退けば、西澤君得意の足拂で仇を討つ。次に出たのは二段千葉四郎である。西澤君相手に取つて不足なしと力戰奮闘大いに努めたが、遂に力盡きて送足拂に倒されてしまつた。野田君は我軍切つての元氣者である。千葉とは體軀に於て甚しい相違はあつたが、君が得意の極端な左がまへには、流石二段の猛者も遂に施す術なく引分に終つた。次に出たのは渥美得一君である。二十貫餘の體軀を提げ、堂々胸を陣頭に進むれば、流石の松尾二段も全く爲す所を知らず、苦も無く返し業で屠り去られた。金子小兵なりと雖も高工數十の勇士を率ゐる總帥である。自ら責任を感じての健闘振りは大いに愛すべきものがあつた。大兵の渥美君と對戦し、跳腰の返しに業有りを取られ、更に數回危地に陥れられても尙ひるまず、遂に内股効を奏して渥美君を破つた。然し戰鬥力はすでに盡きて居る、我新進の藤澤君の跳腰に敗れて退く。藤澤君續く前田もとしきりに攻めたてたが、不幸大外刈を返されて止んだ。前田は徹頭徹尾元氣で我に迫つて居たが、遂に橋口君の左跳腰に屠られた。橋口君力盡きて桑島の大外に破られ、松永君代つて出た。得意の大外や内股で息もつかせず攻め立て、屢々敵を危からしめたが、武運拙くも首投に倒れたのは、君が日頃の元氣を知る者には實に意外の感があつた。二段森久則君此様を見て憤然として疊を蹴つて立ち、桑島に挑戰す。桑島此勢に恐れ、やや焦つて大外刈で攻むるを、何をと許りに返せば『業有り』の聲がかゝる。續いて機を見て巴投をかくれば、流石果報者の桑島某も見事投げ飛されて一本。森君下

某の一本背負に敗れ、神崎代つてよく奮闘したが、時間が来て引分け。

敵兵漸く潰えて早や副將野呂三段が出陣せねばならぬことになつた。彼は強い／＼と評判の猛者である。腰の痛さを押して味方の爲めに出陣した萩原君の厚意と、故あつて遠くに去り、永く稽古を休んで居た幸田君の此日の奮闘とは、假令勝負には敗れたりとは雖も、大いにくんでやらねばならぬ。いよ／＼我軍も副將岡三段が出陣した、元氣の結晶と思はれて居る君の面には既に必勝の色があふれて居る。兩副將の勝負は最初から吾人の期待した所であつた。是を若し國技館の取組に喩ふれば、眞に數萬の觀客を集め得る好取組であるに相違ない。兩雄秘術を盡して戦ふ事暫くして、我が岡君の機を見て掛けたる大外刈には敵も堪え切れず、先づ業有りを取られた。其立ち上るを待つて再び大外刈に攻めて難なく投げ倒してしまつた。いよ／＼敵の大將眞島三段が出馬した。今や勝敗の決は彼の双肩にかゝつて居るのである。敵將元より重い責任を感じ、頗る自重の色が見えた。然し我岡君は元氣の結晶である、まだ些の疲勞の色も見えない、堂々と敵の總帥に應戦した。互に機をうかゞひ合ふ事數分間であつたが、岡は得意の左跳腰を思ひ切つて放てば、流石の眞島三段も一たまりもなく投げ倒され、かくて我軍は大將中野三段を残して、五度連勝の譽を勝ち得たのである。光榮ある綱町道場の歴史は彌が上にも輝き渡るこゝとなつた。

試合が終つた時はもう九時を過ぎて居た。

試合中は互に敵でも、それがすめばもう十年の知己でもあるかの如く、打くつろいで談笑し合ふのが、何時も此勝負の特徴になつて居る。すきつ腹にビールをあをり、早や眞つ赤になつてメートルをあげて居る人もある、例によつて船頭さんも、大工さんも、お百姓さんも盛にかくし藝が出る。和尚さんが追分節をうなるやら、三田の商人も負けては居ず、葉山君が得意ののどを聞かせて大いに度膽をうばふ。あつちからもこつちからも餘興百出、興は仲々つきさうにもない。此間に飯塚師範も立つて大氣焔を吐かれ、盛んに若い者を煙に巻かれた。何時まで騒いでも興はつきないと、十時過ぎ聯

合勝負と師範の萬歳を唱へて引き上げた。

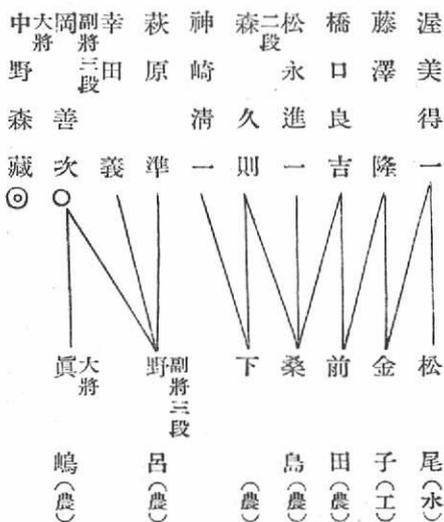
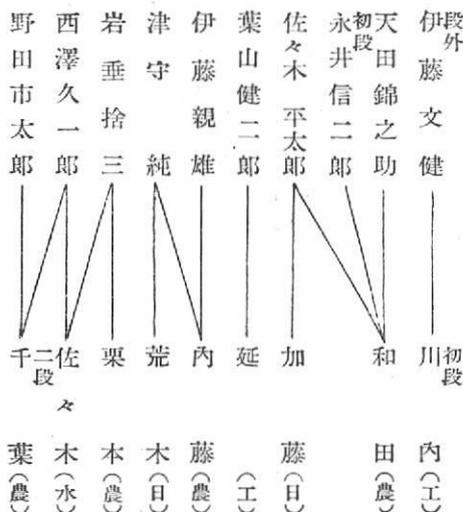
段以上の勝負經過左の如し。

(本 塾)

(聯合軍)

(前略六十一名)

(前略六十三名)



(部報第十一號所載)

(五) 中京及び關西遠征

M N 生

我が柔道部が關西に遠征した歴史は、今より十數年前に一回あるが、その時は敗れて歸つて來たことを先輩に聞かされてゐた。今回の遠征も亦敗戦に終つた歴史ではあるが、これは三田柔道部の大正全盛時代の素因をなした重大な意義を持つものである。

大正二年頃の豫科時代に有望視されて居た者に、中野(森)、富安、岡、服部、幸田、岩崎、關川、小山内、鶴淵、菅井(清)等あり、多士濟々たる此等同志の本科時代が非常に囑望されて居た。事實此等の士は講道館其他諸學校の大會で存在を認められつゝあつて、其實力は自他共に許すべきものがあつた。然るに本科に進んだ頃には、富安、關川、服部、菅井等の超弩級去り、又小山内が胃腸を病み休校してゐると言ふ有様で、さしも囑望せられてゐた同志の本科時代も稍々寂寞の感がないでもなかつたが、道場は和氣に満ちてゐて、皆が部の振興策に努力してゐた。さうしてゐる間に誰言ふともなく、士氣作興三田健兒の意氣を示す爲め、一つ東海道を下つて關西地方の武者修業に出掛けようではないかと言ふ話が持ち上つた。兎に角學年試験が濟んだら部の有志で決行しようと云ふことになり、餘り深い考へもなく先輩方には關西遠征と銘打つて發表したものの、ミツチリ稽古もやらなかつたし、又試験の爲めにそれが出來なかつた。

大正五年四月十一日、飯塚先生以下約十五名集つて正服正帽の勢揃ひ、其の帽子が例の廂のない總のさがつた塾の角帽で、今から考へると一寸振つてゐる。此等は皆山の上の寄宿舎の隅々から集めて來たもので、能く頭に合つたのは少なかつた。おかしなスタイルであつたらうが、夫れでも皆意氣揚々たるものがあつた。

春休で一般の見送りもなく東京驛では淋しい首途であつたが、横濱驛に着いて見ると、吉武、古川の諸先輩十數名の盛んなる見送り、關西遠征と云ふので、食料品を列車に持込んでの偉い聲援の下に送られたのには一同驚いてしまつた。今更關西遠征の看板が大袈裟であつたのに氣付いたが、もう追附かなかつた。まゝよ唯大いにやつて来るまでだと決心を堅めた。

その日静岡に下車、大連館に一泊。翌朝九時頃修道館にて中學及び師範生を相手に稽古をつけ、午後名古屋に向ひ、永瀧先輩等に迎へられ驛前の旅館へ落着いた。其晩は市中見物などをなし、遠征の氣分は更になかつた。翌日愛知一中道場にて稽古をしたが、静岡に比し此處では二段初段が二、三人位居たので、稽古にも調子が乗つて、お互同志も猛烈にやつた。汗を拭ふ暇もなく名古屋を立つて目指す京都に着たのは十三日の夕刻、龜屋旅館へと陣取つた。然し一行には何うも對抗仕合の氣分はなかつたので、其晩も京都名物都踊りへと見物に行き、歸つて見ると宿には磯貝範士其他の有志が押かけて來て居て、明日の試合の打合せと云ふ大袈裟な交渉に一同膽を潰したが、唯の個人亂取位では納まりさうもない形勢であり、そこへ大阪の石渡先輩なども來られて、愈々慶應の名を以て對抗仕合と言ふ事になつてしまつた。對手は全京都、帝大、同志社、武專の聯合軍と云ふ事であり、勝は望めなかつた。然し望みは中野の元氣如何であつたが、彼は腸を病んで居て、漸く癒つて参加が出來たと云ふ始末に加へて、皆が静岡名古屋での練習と旅行の疲れがあるのに、休養の暇がないといふ様な事情の下に、明日の試合を進める事になつた。そこへ松永君が郷里龜岡から馳せ參じ、當時一級の豪の者柿元君も來たので、多少意を強くする所あつたが、武徳殿の試合は結局敵の四將淺水君と味方の大將中野君と引分となつて福島以下三名を残したる京都軍に名をなさしめた敗北振りであつた。此試合中味方で氣を吐いた者は、先づ先頭を承つた柿元君が敵二人を押込み、初めに敵を壓したことであらう。此日親しみ深い部員の腕前を見んものと、武徳殿へやつて來られた石渡、平賀、關等諸先輩を前にして、到頭馬脚を露すの已むなきに至つた吾人の心情は、實に言ふべからざるもの

であつた。

翌十五日大阪に到り、先輩の歡迎會に臨んだが、皆意氣銷沈の體であつた。金澤、石渡、平賀、津田信吾の諸氏其他大勢が見えて居たが、先輩の有難味が身に滲むと共に、唯だ申譯けなく感ずるばかりであつた。その翌日同地武徳殿支部で全大阪と試合したが、此處でも再び無殘なる敗北を重ねて了つた。それより大阪を辭して須磨の内田信也氏の道場に行き神戸高商及び土地の有志と亂取りをなし、神戸で松尾さん方の歡待を享け、先輩の溫情に接し、同日一泊、翌十七日解散此の遠征を終つたのであつた。

此の遠征は何處迄も敗戦の歴史ではあつたが、此の汚名を同志の手で雪がねば死すとも已まぬ勃々たる意氣込みが、期せずして皆の心に起つた。又吾々の先輩の溫情に接する間にも「何故に準備なくして戦を進めたるや」の苦言は、一同に堅き決心と雪辱の念を感奮興起せしむるものがあつた。

茲に於て三田の柔道部は緊禪一番名譽回復の準備戦に猛進し、あの柔道部の遠征の歌「風颯々の武藏野に」に現はれてゐる通り、意氣に燃え鬪志に満ちるに至つた。實際此の遠征は柔道部の空氣を一變したのであつて、爾來吾々は自力更生に志し、協力一致阿部兄弟、崔、福田等の如き有望なる幼年組に力を注ぎ、眞剣な猛練習を進める事一年有半、遂に第二回の遠征を執行して、京都軍には勝味の引分けを取り、大阪軍をば破り、神戸軍とは引分けといふ成績を收め、又第三回の遠征では遂に關西軍全部を降伏せしめ、三田柔道部多年の目的を達成して、光輝ある部史を飾るに至つたことは、當時の一人として感慨無量に堪へない。

尙第一回關西遠征に出馬したる一行の氏名は、中野森藏、岡善次、岩崎清一郎、幸田義、神崎清一、森久則、松永進一、中山信市、葉山健二郎、岩崎清二郎、小林武次郎、野田市太郎、高井孝一、柿元魁等の諸氏であつた。

又餘談ではあるが、多少此の遠征と關聯した我が軍の大將中野個人の武勇傳を茲に附記して置く。

此の第一回戦敗より歸つて、皆が臥薪嘗膽の意氣で稽古してゐた秋の講道館紅白試合に、京都軍の大將であつた福島清四郎君が紅軍の大將（唯一人の四段）として出場して來たが、闘志に燃へてゐた中野三段は時こそ御座んなれと白軍の三將を承り、如何にしても福島に渡り合ひ一矢酬ひざれば已まずとの概があつた。所が味方が一人負け込んで居たので、敵の四將羽石君と先づ顔が合ひ、苦もなく之を斃し、次の馬場壽吉君をも難なく投げ付け、此分なら福島何かあらんと見へしが、懸命の努力も遂に副將小田常胤君に阻まれて引分けとなり、福島君を前にして志成らず機會を失ひたるは遺憾なりしも、彼の膽を寒からしめた丈けあつて、次の關西遠征の時、京都に於て兩雄大將として渡り合ひ、福島をば小外刈に攻めて業有を取り、兩軍引分となつたが、優に目的を達したものと云ふべきである。

（六） 中野正三先生の助手就任

我が部の盛大に赴くに伴れ、部員の數も加はり、師範一人にては其責任重きに過ぐるを以つて、五月八日四段中野正三氏（今は六段）を新に師範助手に依頼して其承諾を得たるは、部員一同の非常なる満足とし、光榮とする所である。

同氏は講道館に於て専ら柔道を修業すること十數年、其技能の卓越せるは、既に世人の知る所、殊に鮮かなる立業の妙味は、嶄然斯界に頭角を現はし、『跳腰なら中野』とまで云はれた元氣潑瀾たる新進の士である。就任以來師範を扶けて、我が部に盡さるゝ勞に對しては、吾々柔道部に關係ある者の特に感謝に堪へざる所である。（昭和八年七段に昇進。）

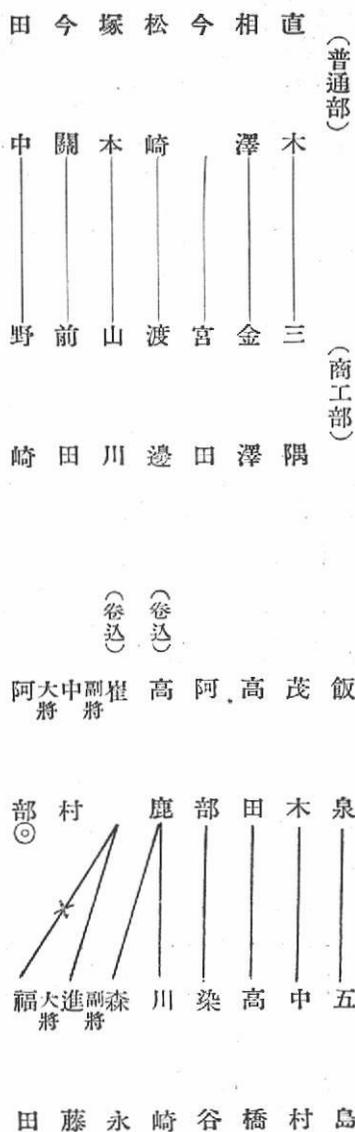
（七） 第二十六回大會

十月三十一日午前中幼年組成年組の二紅白勝負、普通部對商工部試合を終り、午後に入りて、約四十組の有級者三本勝負の後、數種の形を演じ、部長の挨拶ありて有段者勝負を行つた。

普通部對商工部試合

(普通部)

(商工部)



三本勝負

(有級者)



二〇 大正五年史

(日宗) 神田正敬

(七) × 高橋長治

(獨協) 木田行道

(八) × 染谷芳藏

(大成) 小關匡

(九) 野崎誠一郎 (釣込足)

(水) 井上常吉

(二〇) × 五島一男

(農) 石川清右衛門

(二一) × 川崎八治

(麻布) 篠田次郎 (絞)

(二二) 篠田富士男

(三) 大地安三

(?) 添野郁 (押込)

(錦中) 山本豊

(四) 安増潤一郎 (返技)

(水) 三好一郎

(二五) 針生五郎 (大外)

(高輪) 山口萬助

(二六) × 平塚嘉一郎

(攻玉) 永橋剛一郎

(二七) 飯泉甚兵衛 (背負)

(附中) 宮脇哲

(二八) 武田正俊 (足拂)

(日宗) 高政治

(二九) 大塚巳之助 (背負)

(外語) 勝野井哲夫

(三〇) × 吉田精二

(三) 三池忠信

(二二) 佐々木三郎 (跳腰)

(日宗) 横山秀峯

(三三) 廣瀬海人 (腰投)

(大成) 齋藤輝

(三三) 松本篤太郎 (足拂)

(高商) 渡邊英一郎

(二四) 高田與一郎 (大外)

(農大) 佐伯恒雄 (合技)

(二五) 粕谷源三

(深田) 中西廉平

(二六) 森永義忠 (跳腰)

(高工) 藤田暢太郎

(二七) × 高井孝一

(三田) 黑江

(二八) 阿部登 (大外)

(高工) 川島規矩夫 (腰投)

(二九) 花田重起

(早大) 沼田鐵藏

(三〇) × 福田與志三郎

(海城) 萩君守 (背負)

(三一) 進藤茂 (同背負)

(高工) 東海進藏 (返落)

(三二) 中村武雄 (跳腰)

(早大) 澤田 (大外)

(三三) 田中健吉

(攻玉) 高西
(三四) 間中

(講) 横本
(三七) 岩崎清二郎
(跳腰)

(一高) 三井
(三五) 小林武次郎
(絞)

(講) 七尾
(三六) 茂木芳次郎

形

投之形

三段中
野

善次
藏

固之形

二段森
久則
初段葉山健二郎

極之形

三段岩崎
二段橋口
吉

清一郎
吉

五之形

三段中野
二段神崎
清一
藏

(部長挨拶)

(有段者勝負)

(初段)

(一) 廣瀬恒美
(二) 阿部英兒

(一) 高 稻垣正夫(巴投)
(二) 深見重孝

(三) 講 島野政男
山田久一(足拂)

(四) 宗 仁木堯將(大外刈)

(五) 深 近藤義也

(六) 講 米村嘉雄(内股)
天田錦之助

(七) 農 和田又男(背負合業)

(八) 早大 上野藏之助(跳腰)

(九) 東協 山口清三(大外刈)
中山信市

石黒敬七(小内司 背負投)

伊藤親雄

光永善一(明)
葉山健二郎(小内列)

五十嵐豊次(講)
澁美得一(六)

吉田三郎(足拂)

永井信二郎

安藤權太郎(小内列)
津守純(講)

酒井繁雄(早大)
藤澤隆(大外列 跳卷)

吉岡(農)

永井元孝

岩崎親友(内股)
野田市太郎(帝)

廣井(師)
西澤久一郎(小内列 合業)

(二) 段

千葉四郎(内股)

岩垂捨三(背負)

下房二(農)
橋口良吉(小外列)

長畑功(高師)
松永進一(二)

(三) 段

鹽野石一(跳腰 大外列)

岩崎清一郎

佐藤金太郎(講)
岡善次(三)

小田常胤(返業)
中野森藏(四)

(八) 雜記

普通部の東北地方遠征

(柔道部々報十一號所載繁二生の遠征記の要領)

普通部にては、一月の七日から向ふ五日間、東北地方の中學に遠征することに決めた。未だ松の内六日の夜、一行は寄宿舎に集合、種々の準備や打合せをなし、明けて七日早曉五時といふに、一同蹶起して上野に赴き、六時五分青森行の

列車の客となつた。その面々は

一級 西澤久一郎、中村武雄

二級 松村繼彦、阿部英兒、崔燦鶴、茂木邦吉、篠田富士男、阿部大六、横山 巖、茂木芳次郎、安増潤一郎、

高地萬里

最初の相手は栃木縣下の太田原中學。試合は二時から始まつた。審判は中學の先生と尾上二段と交代でやつた。停車場で出迎を受けた時に、馬鹿に大きく見えた中學の選手も試合の進行するにつれて、段々小さく見え出し、僅々四十五分で勝負が決つて了つた。中學は休暇中で稽古も休んでゐた爲に脆かつたのかも知れない。四人目の安増と、茂木(芳)と横山の三氏で、三四人づつを薙ぎ倒したので、當方は八人の過半数の將士を残して大勝を得たのは飽氣なかつた。茶菓の饗應を受けて、夜汽車で福島に到り、其處に一泊した。

八日、午後福島中學を訪れたが、試合は不能とすることにて稽古丈けに止め、仙臺に向ふ。仙臺着が十時半頃であつた。翌日中學と師範と二試合があるので、早く寝るつもりであつたが、宿に着いたのが遅かつたので、横になつたのが、漸く夜の一時半頃であつた。

九日、午前九時から仙臺の師範學校と試合をなす。審判は千葉四段。敵の先鋒小濱氏能く戦ひ、我軍は五人までも犠牲に供せられた。阿部(大)と崔とで、半分づつ取返して互勢になつたが、又も敵の大宮司の爲め三人も取られ、愈々副將中村氏出馬となり、初の相手を難なく打ち据ゑ、次なる三將と試合中、審判官が師範方の柔道着の袖が小さかつたので、着替へさせんと中止を宣告した瞬間、中村は手を離して氣を抜いた爲め、巴投で軽く投げられた。すると審判は一吋間を措いて之を一本とした故、こつちは承知せずこれが紛争の因となつて、遂にこの試合を中止して了つた。

午前の勝負に非文明的試合の厄を喫した我が普通軍の選手は、午後の大敵第一中學との試合に負けてはならじと、各々

相戒めて同校の道場に向ふ。試合は午後二時より、觀覽人多くして地方に稀なる盛況であつた。審判は眞山三段と千葉四段。双方共に能く戦ひ、實に面白き取組であつたが、こゝでは我が軍惜くも敵の副將をして名を成さしめた。

十日未明に起きて松島見物に向ふ。鹽釜に六時半着、先づ岡の上にある鹽釜神社に到りて絶景を遠望し、次に和船に乗り込み、風に帆を上げ、島を廻りて勝景を近く探り、十一時仙臺に歸りて、直に海岸線の列車の人となり相馬中學に赴く。相馬中學はその頃東北地方での優勝軍なりと、仙臺での噂であつたが、業では矢張り何と云つても我が軍に劣ること數等、唯全體を通じて體格の堅實なるには、我が軍も彼に一籌を輸した。二時から始められた試合に於て、我が軍の茂木、崔等見事に戦つたが、一體に敵の腕力によりて業を封ぜられた爲め、戦我に利あらず、遂に敵に二將を残さしめて大敗に終つた。それより茶話會に招かれ、後中村驛より湯本といふ温泉場に着き一泊した。

十一日、龍ヶ崎中學と試合をなす、選手不足とのことにて、兩軍七人づつにて相對す。味方の戰士は中村を大將とし、松村、崔、阿部(大)、横山、飯泉及び高田の諸氏なり。我が軍は昨日敗戦の餘憤をこの最後の戦に洩らして、勢ひ當る可らず、阿部(大)氏は敵の大將の首を打ち取りて大勝を收め、これにて今回の遠征を了つた。

戦績一覽

●	太田原中學
●	中止 仙臺師範
○	仙臺一中
○	相馬中學
○	龍ヶ崎中學

普通部

○中止●●○

普通部部員の活動

本年度普通部員の活動は目覚ましいものであつた。先づ前項の如く新春勿々東北地方の諸校に遠征して英氣を養ひ、更に四月二十九日には高輪中學と戦つて大捷を博し、六月三日攻玉舎の攻撃軍を綱町に迎へて同じく之を屠り、十月十九日には仙臺一中を襲うて、見事に今春の恨を晴らした。左に對攻玉舎試合の記録を掲ぐ。下川生の觀戰記である。

攻玉舎對普通部試合

○候は夏に入る。新緑天地を覆ふて、人々漸く山を戀ひ、水を慕ふの季とはなれり。

○六月三日、此の日攻玉舎對普通部柔道試合、三田綱町道場に開かる。

○玉舎評判程強からず、普通部善戦して大捷を博す。

○玉舎に學ぶもの、多く軍人たるを理想として、短劍に鏑をその徽章とす。吾が普通部に遊ぶもの、多く一國の市民たるを目的として、双ペンは金卸に輝けり。

○軍人と市民、對照頗る妙味あり。而かも劍はペんに敗れたり。

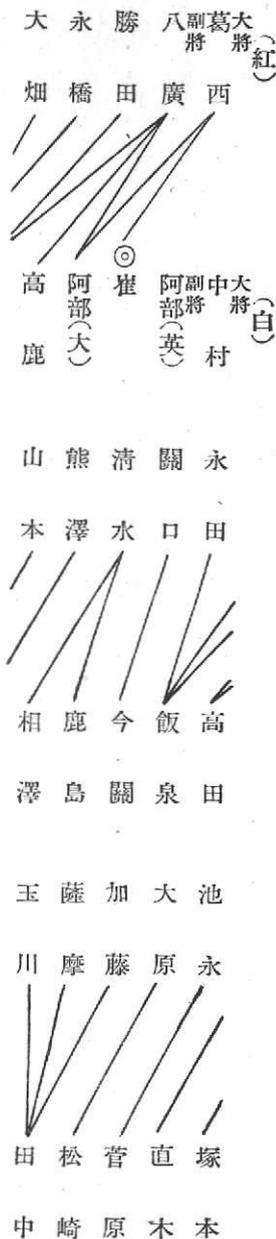
○往年關義雄氏（義塾柔道部先輩）玉舎に學び、玉舎柔道部の牛耳を執りて、斯界に重きをなせし事久し。

○午後二時飯塚師範聲援拍手を禁じて開戦を宣すれば、四段中野正三氏立て審判、三十の闘士決死の色面に現はれ、殺氣自ら滿場を壓せり。

○戦ひは玉川、田中を以て始まり葛西、崔を以て終る。

- 紅軍（玉舎）の將士體軀頗る堂々として、オンダン誠に美事なるに反し、白軍（普通部）押しなべて小粒なり。
- 柔能く剛を制するか、剛能く柔を壓するか、柔道の妙味は正に茲にあり。然れども力、術を凌ぐに至らず、蠻力徒らに白軍の戦功を大ならしめて、紅軍の將士顔色なし。
- 唯紅軍に勝田あり。敗れたりと雖も、高田に對する奮戦取口誠に鮮かにして、其技術賞讃に價すべきものあり。
- 副將八廣は紅軍第一の戦功者なれども、取りとめて言ふ程の事もなし、大將葛西の貫録に至りては、敗け方のあまりに早かりし爲、其實力を云々する事能はざるを悲しむ。
- 白軍中特筆すべきは田中、飯泉にして、火を發するが如き田中の奮闘振りは、惰夫をして起たしむべく、理智的裁斷による飯泉の試合振りは、觀者をして柔道の眞價を悟らしむ。兩者の優勝振りは、當日の白眉として永く普通部柔道史上に輝くならん。
- 若冠、松崎、直木、菅原が能く大漢の強襲に堪へたるは賞すべく、塚本、今關、鹿島の引分は是非なきところ、相澤の敗れたるは少しく物足らず。
- オモチン高田の後に高鹿の倒れたるは目立ちたり、高鹿たるもの一工夫なかるべからず。
- 阿部大が八廣を倒せしは順當にして、葛西に敗れたるは是非なし。
- 崔なんなく葛西を押込めば、阿部英、中村の兩將戦はずして桂冠白軍の頭上を照らす。
- 斯くして攻玉舎は敗れ、普通部は勝てり。
- 想ふに玉舎尙普通部の敵にあらず。
- 勝負表左の如し。

合宿日誌



恰度一學期も終りに近づいて、降りつづいた五月雨の名残りが、緑の葉末に夕日を受けキラ／＼と輝く、濕つばい中にも潑刺たる生氣の満ちた七月八日の夕方であつた。濃やかな緑につままれたヴィツカースホールの庭に臨んだ大廣間に、白布に蔽はれたテーブルを圍みながら半ばビールのおきと、半ば一種の興奮とで緒らんだ顔を集めて、熱心に何事かを物語る屈強な若者の一群があつた。彼等は何事を物語り何事を企てたのであらう。

夫れは丁度塾の柔道部の選手が、春の休みを利用して關西遠征の壯舉を企て、而も京都に大阪に無様な敗北の悲運を嘗めて歸つて来て、先輩の熱あり誠ある苦言を聞かされ果てた揚句の事であつた。彼等は自分等の失敗に對する悔恨と、火の様な先輩の同情に對する感激とに依つて、非常なる興奮と眞面目さを以て京都再襲の事を議しつゝあつたのである。次に書き續けられる合宿日誌の一篇は、其當夜彼等が議決した京都遠征再襲の第一着手としての準備行爲である。アア、如何に青年は感情的で褪めやすいとは云へ、如何に現代は輕佻浮薄の世であるとは云へ、その間にあつて、彼等が、否!! 福澤先生の門下、而も剛健を以て任じて居る柔道部々員があれ程の熱心さと、あれ程の眞面目さを以つて約し得た所の

ものが、禿筆なる此の一片の日誌であらうとは、概くも亦愚かな事ではないか。遮莫、此の日誌を通じて現れて居る麗しき流れは、我柔道部の生命を永遠につなぐ貴い血潮なのである。

九月一日 快晴 前日から氣の早い連中は泊り込んで居る。中野さんに神崎、松永、高地の四人だ。規定の八時には五人ばかりやつて来た。先生も見える。五拾日の休みの間に蓄積し得た元氣で、ピンピンした稽古が始められた。中野さんの猛烈な内股で皆すつかり腹を減らして終ふ。午前十一時に切り上げて幼稚舎の賄に飯を食ひに行く。名にし負ふ猛者の揃ひ、お鉢の底をたゞいて興に入る。二時迄晝寝をした。家から通つて連中に起された頃には、午後の日がカン／＼と道場をのぞいて居た。三時半から稽古衣を着る。寒暖計は九十度以上を示して一本稽古をやれば汗は瀧の様だ。五時頃湯を浴びて、梢を渡る夕風に袂を吹かれながら食堂を襲ふた。歸つて来て、皆共力して蚊帳の釣手を造る、頗る珍妙だ。道場の真中へ三ツの蚊帳を吊つて、九時疲れた軀を投げだした儘、合宿の第一日はかくして暮れた。明日は誰が来るだらう。(合宿者)神崎、岩崎、森、松永、花田、永井元、高地、(通者)伊藤文、尾山、福田、阿部大、阿部英、津守、高井、山田、田村。

九月二日 快晴 朝の稽古の始まる頃、渥美と野田がやつて来た。臺灣と朝鮮とからである。兩殖民地の代表者を迎へて我々は尠からずうれしかつた。晝から臺灣からの龍眼肉を嚙つて居ると、待ちに待つた中野がヒョッコリやつて来た。稽古は人を得て益々活氣を帯びる。今夜は蚊帳を二つ殖やした。廣い道場を明け放しだから仲々涼しい。合宿者、神崎、岩崎、中野、松永、森、永井、渥美、野田、高地、花田、(通者)伊藤、尾山、福田、進藤、阿部大、阿部英、津守、高井、菅原浩、田村、菅原卓。

九月三日 快晴 毎朝起される中野さんに、今日も亦起された。連日の好天氣、日光は朝から其猛威を奮ふて八十五度の暑さだ。何處を見ても頑猛ばかり、生温い稽古なんかは一本だつて出来やしない、従つて汗は止め度なく流れる。

午後からは九十度に昇つた。此の暑いのに朝と午後一日に二度づつ家から道場に通ふ連中も、大抵ぢやなさうだ。今日は誰も来ない。待つて居ても仕方がない、今日は来ないものと諦めなければならぬ。稽古を終へて夕月の影梢にかゝる頃、浴みして一杯のアイスクリーム、一杯のビール、『河豚喰はぬ人には云はじ河豚の味』だ。

九月四日 合宿中の食堂で、其雄を争ふものが五名居る。即ち中野、岩崎、神崎、永井、松永である。番外横綱として中野さんの居るのは勿論である。以上五名の内、常に優勝の地位に立つものは松永だ。今日も朝つばらから汁三杯に（而も三人前入りの汁茶碗だから驚く）、飯六杯と云ふ大スコアだ。我々は茲に敬意を表して、炊事委員長を特にエエン長と呼ぶの尊號を奉つた。此の尊號を贏ち得たのも、一に君の人一倍猛烈なる稽古に依るのかも知れない。強ち君の胃の腑の大きなのにばかり歸せしめるのも、氣の毒の様な氣がしないでもない。

明日は總員擧つて玉川ゴ－と定む。松永エエン長揭示して曰く、『多摩川行。明日午前八時道場集合、會費三十錢。交通機關自辨。稽古休み』と、即ち明日は稽古が休みだ。所謂我々の日曜だ。『明日は日曜だぞ！』と盛んに稽古をする。臺灣傳來のマラリヤの渥美も根太で弱つてゐる元さんも、一生懸命に奮闘する。到頭朝から夜稽古の連中の來る頃迄ぶつ通した。湯に入つてスキ腹抱えて食堂へ流れ込む。果して何杯食つたものやら、驚いたのは賄也。夜は又高地、中野の笨碁がもてる。

九月五日 七時起床九時出發、一行十八名。今日も不相變の日本晴れだ。皆の顔にはノビノビした氣分があふれて居る。豚肉を擔ぐ人や、葱を提げた人や、先生の御馳走の梨をブラさげた人は、三十分を澁谷から愉快に電車に揺られ乍ら二子の渡へ降りた。何處に仕様かと散々迷つた揚句、嶋の中なる一力亭に腰を据えた。早速飯と豚の調理方を命じて置いて、一寸失敬して來た紫帶をしめ、泳ぐ連中もあれば、先生を中心にして將棋を指す連中も居る。皆次へ次へと先生に破られる。將棋はあんまりやつた事はないんだがと、先生の例のがそろ／＼と頭をもち上げる。中野さんなんかは何度もぶつか

つて盛んに口惜しがつた一人だ。涼風頻りに簾を揺がして我黨の神氣は爽快である。高井デブ君や、大チャン、英チャンの茶目連はさる事ながら、鬚面提げた大男迄がすつかり好い氣持ちになつて騒ぎ廻るから面白い。飯の仕度が出来ると一同車座になつて又一と奮闘。満腹を覚えれば眠てしまふ、他愛のないものさ。松永は網を擔いで、保津川の腕を玉川に振つた。獲たる所、鮎一匹。それでも酔につけさして勿體なさうに食ふ所に仁王様の愛嬌がある、夕陽富岳の背に脊く頃、盡きぬ名残を惜しみつゝ、再び車上の人となつた。元さんは豚のせいで根太が痛むと云ふ、渥美さんは風にあたり過ぎて傳來のマラリヤが昂じたと云ふ。一行は飯塚師範、中野助手、中野、岩崎、神崎、松永、森、津守、永井、渥美、岩垂、野田、尾山、伊藤、高地、花田、阿部大、阿部英、高井。

九月六日 快晴 昨日の清遊に午前の稽古は調子はづれだ。皆ボヤムゝして居る。それでも暑いから食堂の氷水は美味く飲んだ。晝からは昨日の豚が廻つたせいか、皆活き返つた様に稽古をする。葉山さんが圓く肥つて九州から來た。合宿は元さんが根太で、残念ながら退却し、一人減つたがうまく葉山さんでうづまつた。

九月七日 快晴 煩さいと思し召してか、人臭さいと感じてか、それともマラリヤの傳染を憂ふる公德心の發露でか、渥美さんは劍道部に寝て居る。その起きるのを待つて一同が朝飯をたべると、平凡の一日が展開した。人の來たるなく、事の起るべきなし、朝稽古を済まして食堂の氷水に渴を醫し、夕べ稽古を終へて三田通りの錢湯に行く事常の如し。

疲れもいとはず「銀ブラ」を主張するものがある。即ち神崎及び松永委員長だ。

九月八日 快晴 不相變暑い、汗の香が道場に満ちるのは、稽古の猛烈さを示して居る、晝から茂木芳兵衛がやつて來て、異様な聲を出して稍異彩を放つた。八日間の猛烈な稽古に疲れを覺えて、頭がシンプルになつたせいも、一寸した事にもわけもなく笑ひくづれる、間が抜けて仕舞つて陽氣になつたんだらう。軀が續かないから、明日は半日休まうと云ふ提議に一同賛成はしたが、休みを午前中に仕様か午後仕様に仕様かと云ふ事が大分問題になり、到頭午前説が勝を占めた。明日

は起される心配なく寝られると、嬉しさうに床に入つたのが十時過ぎであつた。

九月九日 快晴 皆起きたのが九時半だつた。未だ寝足りないと思ふものもあれば、家へ歸る者もある。碁を打つもの將棋をさすもの各々勝手な真似をして、永くもないが然し貴重な半日を送つた。午後からは平常の如く三時から稽古をする。半日の休養を得て元氣は自ら新たなるものがある。夕食後一の橋の活動を見に行く者四名。外題は「虎列刺豫防注射の効き過ぎ」とか云ふ大活劇だつたさうだ。さぞ面白かつたらうと残された連中が口惜しがる。

九月十日 今日合宿の最終日であると同時に、新學期のスタートだ。稽古も自らしんみりとして居る。海人もしんみり越中から出て来て稽古をしたが、早速腰を痛めてしまつた。多大の抱負と光明に満ちた學期の初め勿々の負傷は、實に同情に堪えない。元さんに出た根太が蔓延したか、合宿の終りになつて盛んに被害者を出したが、津守の家傳妙薬で大抵なのはひつこんで仕舞つたらしい。しかし唯一つ中野さんが残つた。それから元さんも癒らないと見えて、其後薩張顔を見せない。夜は六時から合宿解散の宴を張つた。二十有餘名は睦じく百九十疊の眞中へ車座になつてビールの盃を揚げた。松永の挨拶終つて、コツプ頻に飛び氣焔萬丈、一夜仕込の博多節に得々たるもあり、中野さんの大島節、松永の詩吟、葉山の元祖博多節等、愉快はそれからそれへと轉じて何時果つるとも見えない。殊に野田、高地の愉快振りには、今夜の白眉であつた。いゝ加減調子の乗つた頃、野球部の合宿連中が十數名やつて来て、木曾踊りやら浪花節やら聲色やらいろんな藝當を演つて見せて呉れた。いつかの晩、皆で押し掛けた時の返禮だらう。永井信も向島から眞黒になつて來た。興は益々加はつて十日間の鬱氣は一時に散じた様な氣がした。残り惜しいと云つて止まつた五人を除くの外は、皆引揚げて終ふ、月は眞白にグラウンドを照して居る。斯くて合宿も我々の思出の種の一つとなつてしまつた。多分我々が他日學生時代を追憶する時には、毎に網膜の底に現はれて來るパノラマであらう。(森久則)

第二回對高師試合不調

先に高等師範よりの申込に應じて、漸く陣容を整ふることを得たのに、十月に至り人數の點に於て幹事の交渉も水泡に歸し、已むを得ず中止することになった。

道場雜感

(左の一文は下川生の筆、明治四十年頃より大正五年前後にかけて名を成したる部員を品隲し、併せて道場の狀況を叙したるもの。)

▽雷名斯界に高き四段中野正三氏助教として我部に來る。鋭鋒當るべからず。神に入れる其技倆は吾人をして驚嘆せしめ初段二段飛んで宛然高等玩具たるの觀あり。

▽師範に飯塚七段を奉戴し、助教に中野四段を仰げる我が柔道部は多幸なりといふべし。將來の向上發展期して待つべきものあるは、吾人の誠に欣幸に堪へざるところなり。

▽曾て平賀恒次郎、中野榮三郎、塚本太作、石渡泰三郎等の諸氏相次いで四段に列せられ、三田道場の名聲天下に冠たりしが、四氏が塾を去るに及んで絶へて四段の壘を靡せしものなし。

▽是れが後繼者としては、清水耕作、山本忍己、塚本福治郎三氏の名最も高かりしが、時至らずして社會の人となられしは惜むべき事といふべし。

▽更に新らしき後繼者を求むれば、中野森藏、岡善次、岩崎清一郎の三氏なり。新進に有望なるもの多けれど、是等に望むは尙未だ早し。努めて怠らざれば涙美符一新進中最も衆望あり。

▽近頃背負廢れて跳腰全盛を極む。背負の振はざるは斯技の名手なきが爲めに於て、跳腰の旺盛はこれに志すもの多きが爲なり。

▽往平谷村治吉氏背負に聲名あり。近くは頑ちやん白方梅吉氏斯の業を以て得意となす。前者は理詰にして後者は剛引なり。從て谷村氏の背負にはいふべからざる妙味あれど、頑ちやんの背負は蠻力一世を空ふするてふ元氣ありたり。

▽跳腰が今日の隆盛は山本忍己、塚本福治郎兩氏の力與て大なり。山本氏は跳腰内股の專賣にして、塚本氏は背負より跳腰に移りしもの、幼年二級時代の塚本氏は尙背負の稽古に餘念なかりし。

▽島泰次郎、尾上繁二、幸島正路等の諸氏いづれも幼年組時代は背負を以て唯一の武器となせしもの、黒帯となるに及んで、背負は漸次跳腰跳卷と化したるものなり。

▽釣込腰の美は平岡義夫氏によりて遺憾なく發揮せられ、幸田二段斯技に鮮かなりと雖も、平岡氏に及ばざる事尙遙かに遠し。

▽内股は清水耕作氏にしてシャモ屋は近岡源三氏なり。疊に落つるまで一回轉するは耕作氏の内股にして、微笑を含んで頸に手を掛けるが源三氏なり。

▽フアーストヘビーに名ありしは藤平眞、幸島正路、長塚芳太郎の三氏なり。而かも最後の一分間にあらずして最初の一分間なり。最後の一分間能く戦ひしは守谷正毅氏なり。

▽寝業に巧なりしは飯塚茂氏にして、足業に妙を得しは岡安寛司氏なり。而して支釣込足は坂東舜一氏なり。

▽受身は島泰次郎氏にして、曾て本塾大會に同氏の型を見し帝大有段者稱揚して曰く、正に日本一なりと。

▽頃日講道館昇段式に於て岩井茂、天田錦之助、伊藤文健の三氏初段に列せられ、松永進一、橋口良吉、岩垂捨三の三氏二段に昇段せり。

- ▽六氏の昇段はいづれも努力の賜にして、更に怠らずんば高段者たること難事にあらざるべし。
- ▽三段鶴淵毅氏當部選手より除名せらる。吾人其理由の如何を知らず。唯氏の爲めに惜むものなり。
- ▽昇段の吉報と相並んで除名の凶報は道場に掲示せらる。是等は夏の道場に何を語るか。
- ▽暑氣激しき爲めか、試験切迫せし爲めか、道場頗る淋し。
- ▽近頃小山内式拂腰の衰へて、岩垂式足取盛んなり。榮枯盛衰、新陳代謝は斯かる技術の上に乗じて實現せらる。
- ▽中野四段相撲を好み、稽古後岡善次、渥美得一氏等と力を角する事あり。其技術相伯仲せりといふべし。
- ▽先づは感じたまゝを記する事斯くの如し。

(下 川 生)

進級一括

○一月九日講道館鏡開きに於て

- 初段へ 津守 純、後藤辰治、尾山和男、野田市太郎、佐藤米藏、西澤久一郎、藤原惣次郎、伊澤常三
(先輩) 岩崎彌一郎、田野元次、平沼亮三、後藤幹夫
- 二段へ 神崎清一、川崎勝馬、(先輩)小泉 浩
- 三段へ 岩崎清一郎、關川源一
- 四段へ (先輩)飯塚 茂
- 七段へ 飯塚師範

○一月二十三日月次勝負の結果

二級へ 土井文治、宮永金太郎、横井一郎、田沼富士太郎、染谷芳藏、高田與一郎、松永義徳
一級へ 廣瀬海人

○二月十三日紅白勝負の結果

二級へ 高橋長治、八代伍七、飯泉甚兵衛、今關 清
一級へ 高島萬里、岩崎清二郎、崔燦鶴、阿部英兒、松村繼彦

○講道館昇段式に於て

初段へ 渥美得一、佐々木平太郎、永井信二郎、山本誠一
二段へ 森 久則

○五月十日紅白勝負の結果

二級へ 五嶋一男

○聯合軍との勝負の結果

二級へ 西岡誠一、佐藤寛倫(編入)

一級へ 菅原剛寛、森永義忠、阿部大六、茂木芳次郎、井上敏夫(編入)

○六月の月次勝負の結果

二級へ 田中哲郎、添野 郁

○十月七日月次勝負の結果

二級へ 針生五郎、野崎正一郎、大塚巳之助、武田正俊、七條清則(編入)
一級へ 高鹿正夫、粕谷源藏(編入)、深見重孝(編入)

○十月十三日講道館昇段式に於て

初段へ 深見重孝、阿部英兒

○十一月五日同前

初段へ 中村武雄、小林武次郎、花田重起、井上敏夫、崔燦鶴、福田與志三郎、進藤 茂

二段へ 藤澤 隆、渥美得一、野田市太郎

○十一月九日大會の結果

二級へ 室野三郎、相澤 一、塚本敬三、前田誠一郎

一級へ 横山 巖、田沼富士太郎、高田與一郎、染谷芳藏、川崎八次、武田正俊、松本篤太郎、吉田精二

○十二月の月次勝負の結果

二級へ 佐藤權、小早川精一